

ダウン症候群にみられるこだわりの特徴とその支援

松田 亜希子 名古屋市立天白養護学校

要旨：本特集では、ダウン症者のこだわりの実態と対応方法を明らかにするため、論文のレビューを行うとともに、実態についての報告を行った。菅野(2014)では、こだわりに関してダウン症、自閉症、知的障害(広汎性発達障害を除く)、急激退行を示すダウン症を対象にこだわりの出現の実態を調査した。その結果、知的障害よりも高率にこだわりが認められ、より高齢でこだわりの出現率が高いことや、学校や施設に比べ家庭で多く現れていることなどが明らかになった。2007年の調査では、幼児期と学齢期を含めてダウン症のこだわりについて検討した。この調査では、こだわりへの対応が切り替えに影響を与えることがわかった。切り替えの要因は、障害の程度、コミュニケーション能力があげられた。また、切り替えと養育の配慮についても関係性があり、養育配慮項目が多い方切り替えが良好であり、ライフステージごとにその時期その時期に求められる配慮領域(発達課題)に取り組んでいることが明らかになった。この結果は、こだわりへの対応は、その問題への直接的な対応だけではなく、ライフステージ各期に求められる発達課題に取り組むことの重要性を示唆する結果となった。

Key Words： ダウン症、こだわり、切り替え

I. はじめに

ダウン症児・者は一般に不適応行動が少ないといわれている。例えば青年期のダウン症者を自閉症者と比較すると全ての領域で良好であり、問題行動が少ないことを示す知見がある(Laveland, K.A. & Kelly, M.L., 1988)⁷⁾。

しかし、学齢期の問題行動について調査した細川かおり・菅野敦・橋本創一・池田由紀江(1998)¹¹⁾は、「頑固である」「発音不明瞭」「好きなことは続くが、気が向かないことは続かない」「動作が遅い」「思い通りにならないと引きこもる」が多くみられたことを報告している。また近年、青年期のダウン症において、能力や活動水準の低下・性格の変化・神経学的な変化・心理行動面の問題が出現し、生活適応水準が急激に低下する『退行』現象を示す症例が報告されている。斉藤優子・宮本信也(2000)¹³⁾は『退行』現象について広範囲の調査を行い、「退行群」は非退行群に比べ新しい環境への苦手さがあること、環境の変化を嫌がること、嫌なことがあったりいらいらしている時に周囲の人に助けを求めずに我慢していることなどを報告した。

菅野敦・橋本創一・池田由紀江・細川かおり・

川崎葉子・横田圭司(1997)⁹⁾および菅野敦(1998)²⁾は、急激退行はダウン症の性格や行動特性と深く関わる症状であることを報告し、ひきこもりやこだわりの具体的な症状として急激退行の主な症状とされる動作の遅さや限られた興味・関心があるのではないかと述べている。

一方、青年期・成人期に急激退行を示さない健康なダウン症者においても、いわゆる「こだわり」がみられ、日常生活において支障をきたす者がいるという報告がなされている(菅野敦・川崎葉子・横田圭司; 2004)⁶⁾。本特集では、ダウン症者のこだわりの実態と対応方法を明らかにするため、論文のレビューを行うとともに、実態についての報告を行う。

II. レビュー

1. 青年・成人期ダウン症候群のこだわり

菅野ら(2004)⁶⁾は、青年期・成人期のダウン症、自閉症、他の原因による知的障害(広汎性発達障害を除く)、急激退行を示すダウン症を対象にこだわりの出現の実態を調査した。

調査対象は、東京都、神奈川県内の養護学校、特殊学級に在籍する発達障害児と東京都、神奈

川県内の成人を対象とした施設に所属する知的障害者及び都立 A 療育園に健康診断や、心理、言語訓練の目的で通院してきた発達障害児のうち、現在、特定の疾病診断を受けていない健康なダウン症者である。さらに比較のために自閉症者及び(ダウン症、自閉症以外の)他の原因による知的障害者(広汎性発達障害をのぞく)も調査対象とした。また、急激退行を示しているダウン症者は、都立 A 療育園に通院し「20 歳代の若年齢段階に、生活適応能力の急激で著しい低下を示した者で、特定の疾病診断を受けた者は除く」という基準にてらし急激退行群の対象とした。

対象者の内訳はダウン症者 52 名、自閉症者 40 名、知的障害者 30 名、急激退行ダウン症者 23 名である。調査内容は、「こだわり」に関して DSM-III と DSM-IV の自閉性障害の診断基準を用いて「(こだわりに関する)行動質問票」

を作成し、ダウン症、自閉症、他の原因による知的障害(広汎性発達障害を除く)、急激退行を示すダウン症を対象にこだわりの出現の実態を調査した。

障害種別にみたこだわりの出現率をみると、自閉症はこだわりが「目立つ」と「少しある」合わせると 90%と最も高率にこだわりが現われ、ダウン症は 50%、知的障害は 23.4%に現れ、ダウン症は知的障害よりも高率に認められたことを報告した(Fig.1)。自閉症は、その診断基準にこだわりに関する行動特徴が含まれる障害であるため、この結果は予測されるものであった。一方、ダウン症はこれまで行動、性格、態度に問題があるという認識はされてこなかった障害である。そのダウン症者の半数にも及ぶ 50%にこだわりがあることを示すこの結果は、重要な知見である。また、遅滞の程度別にこだわりの出現率をみると(Fig.2)、ダウン症に

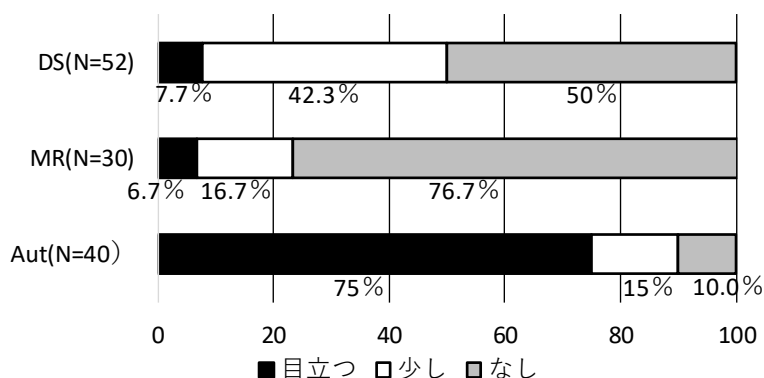


Fig.1 障害種別にみたこだわりの出現率

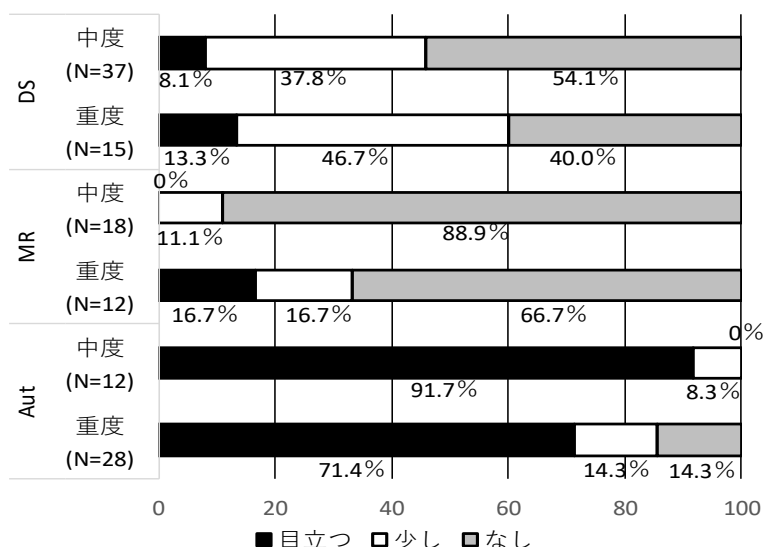


Fig.2 障害種別・障害程度別にみたこだわりの出現率

おけるこだわりは、遅滞の重度化により増加することが明らかになった。

また、対象者を15歳以下群と16歳以上群の2群に再群化し、年齢段階別にこだわりの出現率をみると(Fig.3)、3障害とも年齢がより高い16歳以上群は、15歳以下群に比べこだわりの出現率の上昇がみられた。なかでもダウン症は「目立つ」と「少しある」を合わせたこだわりの出現率が41.4%から60.2%へと最も大きな上昇がみられた。

「こだわり」の具体的な内容をみると、ダウン症の「こだわり」は自閉症同様「視空間に関するもの」、「時間・順序に関するもの」、「手洗いや儀式歩行」などの各項目にわたっていることが明らかになった(Fig.4)

ダウン症のこだわりが、環境によってどのように現れるかを明らかにするために、行動質問票の27質問項目を8領域((ア)知的、言語的興味・関心の狭さ、(イ)環境や時間・ルーティンへの)こだわり、(ウ)運動、姿勢、感覚的な常同、

(エ)物への常同、(オ)心気的反応、(カ)拒絶・恐怖、(キ)その他(がんこ、活動の停止等)、(ク)独語)に配し、家庭でのこだわりを保護者の結果から、施設や学校でのこだわりを施設職員と教員の結果から分析したところ、施設では出現率20%程度とあまり問題にされない現れ方を示したのに対し、家庭では平均すると50%(20~90%)を超過出現率を示していた(Fig.5)。

さらに、Fig.6では急激退行を示すダウン症のこだわりと、健康に成人期を過ごすダウン症のこだわり、自閉症のこだわりの出現率を算出し、比較した。ア〜クは、Fig.5のこだわりの分類と同様である。図より、急激退行を示すダウン症者では自閉症とほぼ同程度のこだわりを示し、こだわりの内容によっては自閉症よりも高い出現率の行動もあることが明らかにされた。

2. ダウン症児者の「こだわり」の実態

菅野ら(2004)⁶⁾の青年・成人期ダウン症におけるこだわりの研究をもとに、2007年に日本

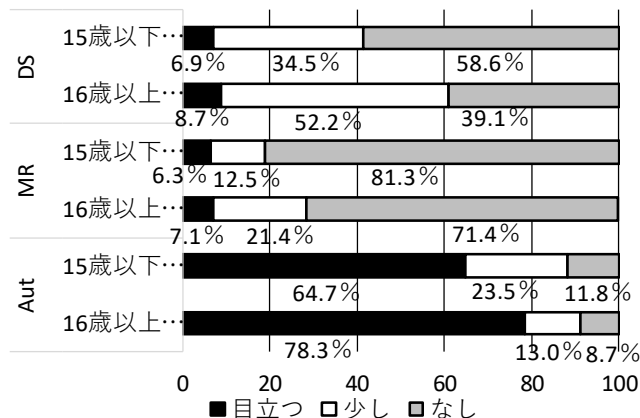


Fig. 3 障害種別・年齢段階別にみたこだわりの出現率

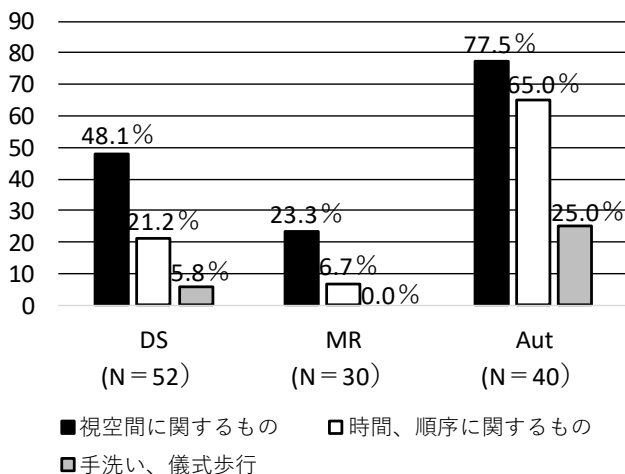


Fig. 4 障害種別にみたこだわりの内容

ダウン症協会の協力を得て 808 人(幼児期 125 人, 児童期 326 人, 青年・成人期 357 人)を対象として調査を行った. ライフステージでみると, 幼児期で約 4 割, 児童期, 青年・成人期で約 5 割の者にこだわりが認められた(Fig.7). 幼児期, 学齢期を含めた本調査においても, 菅野(2004)⁶⁾の調査と同様, 加齢に伴って出現率が高くなっている実態が明らかとなった.

「こだわり」の内容については, 幼児期は「配列・空間のこだわり」, 「儀式的行為・習慣」の順に多く, 学齢期, 青年・成人期については「儀式的行為・習慣」, 「配列・空間のこだわり」, 「興味・対象のこだわり」の順に多かった.

また, 「こだわり」と年齢, 性別, 合併症の有無, 障害の程度, コミュニケーション能力との関係を検討し, 「こだわり」の出現に関係する要因を検討した結果, 年齢, 障害の程度, コミュニケーション能力に関係性があることがわかった. Fig.7 は年齢によるこだわりの出現率, Fig.8 は障害の程度によるこだわりの出現率,

Fig.9 はコミュニケーション能力によるこだわりの出現率である. 年齢では, 青年・成人期でこだわりが「よくある」が多く, 幼児期ではこだわりが「ほとんどない・ない」が多かった. また, 障害の程度では, 重度で「よくある」「ときどきある」が多く, 中軽度で「ほとんどない・ない」が多かった. さらに, コミュニケーション能力では, 「意味のある発語はない」で「よくある」が多く, 「二語文程度」で「ときどきある」が多く, 「複雑な会話」で「ほとんどない・ない」が多かった. これらの結果は, 菅野(2004)⁶⁾における, 遅滞が重度の方がこだわりの出現率が高く, 年齢段階が高い方がこだわりの出現率が高いという結果と同様の結果となった.

こだわりが出現した年齢について成人期の結果を Fig.10 に示した. 就学前 32 名(19%), 小学校 46 名(27%), 中学校 38 名(22%), 高校 22 名(13%), 成人してから 33 名(19%)であった. これより, こだわりは, どの年齢段階からも出現することが分かった.

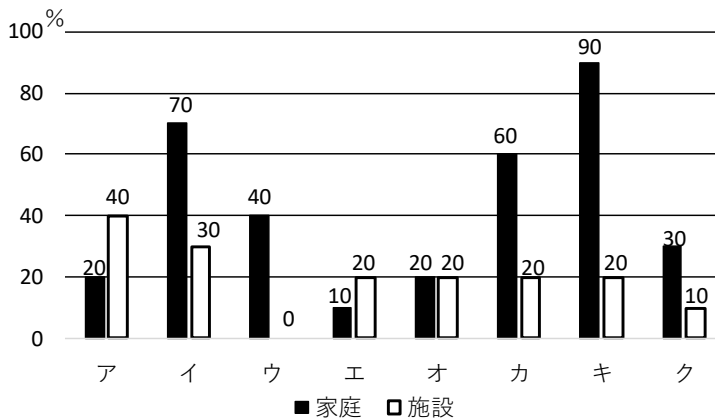


Fig.5 家庭と施設におけるこだわり関連行動

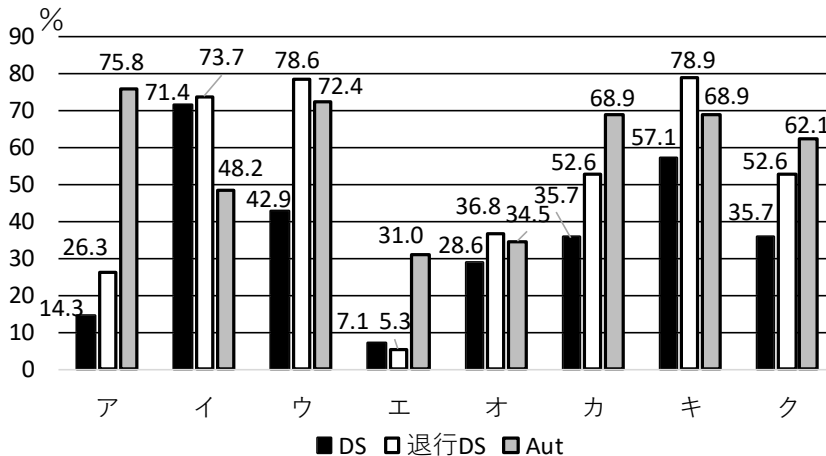


Fig.6 急激退行を示したダウン症者のこだわり関連行動

3. ダウン症児者の「こだわり」への対応と「切り替え」

小澤勲(1968)¹²⁾は「こだわり」について、「本症状が認められること自体が問題なのではなく、それが症児の行動の大きな部分を示しているということ、しかもそれが長時間持続するということの機制こそ問題とすべきである」と述べている。「こだわり」があっても、「切り替え」ができることが必要である。切り替えの様子をライフステージ間で対応方法別に検討した。Fig.11 は幼児期のグラフ, Fig.12 は学齢期のグラフ, Fig.13 は青年・成人期のグラフである。

すべての年齢段階においてこだわりの対応方法と「切り替え」には関係性がみられた。幼児期では「様子を見ながら説得する」と回答した群では、「時間はかかるが切り替える」との回答が多く、「本人に任せてこだわり行動が終わるのを待つ」と回答した群では、「切り替えられない」との回答が多かった。学齢期では、「その場でなんとか説得して、こだわり行動をやめてもらう」と回答した群では、「すぐに切り替える」との回答が多く、「時間はかかるが切り替える」との回答が少なく、「切り替えられない」との回答はなかった。また、「本人に任せてこだわり行動が終わるのを待つ」と回答した群で、「切り替えられない」との回答が多かった。青年・成人期では「その場でなんとか説得して、こだわり行動をやめてもらう」と回答した群で、「すぐに切り替える」との回答が多かった。また、「様子を見ながら説得する」と回答した群で、「時間はかかるが切り替える」との回答が多く、「切り替えられない」との回答は少なかった。さらに、「本人に任せてこだわり行動が終わるのを待つ」と回答した群で、「すぐに切り替える」との

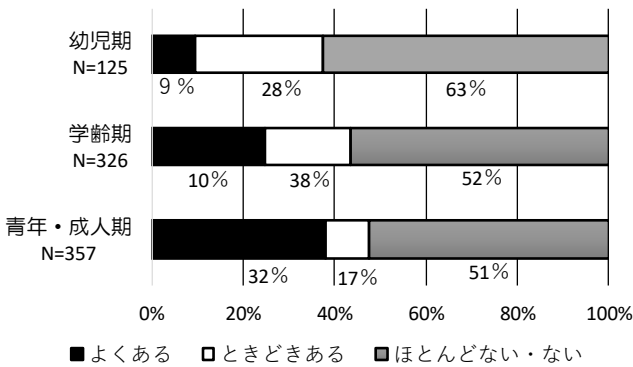


Fig. 7 こだわりの出現率

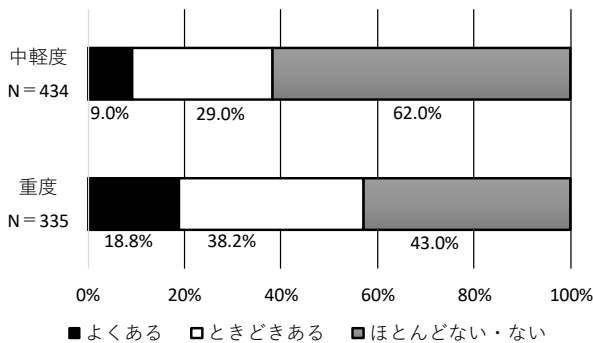


Fig. 8 障害の程度によるこだわりの出現率

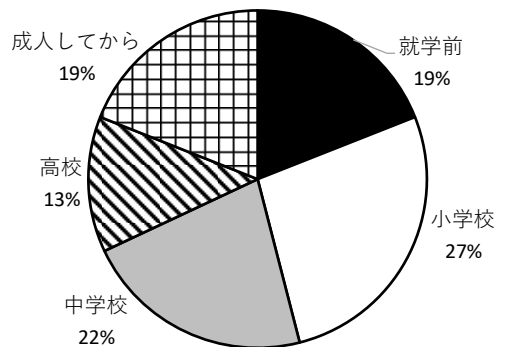


Fig. 10 こだわりが出現した年齢

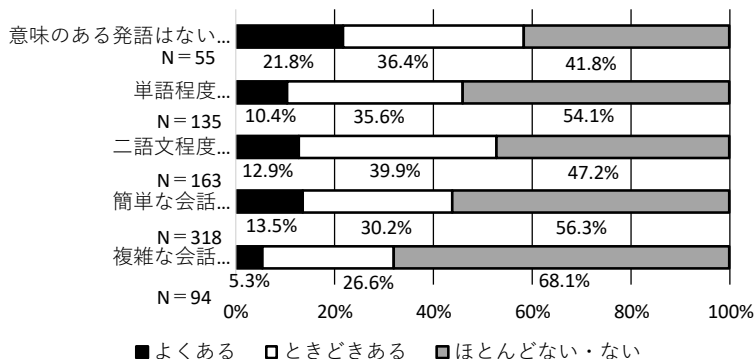


Fig. 9 コミュニケーション能力によるこだわりの出現率

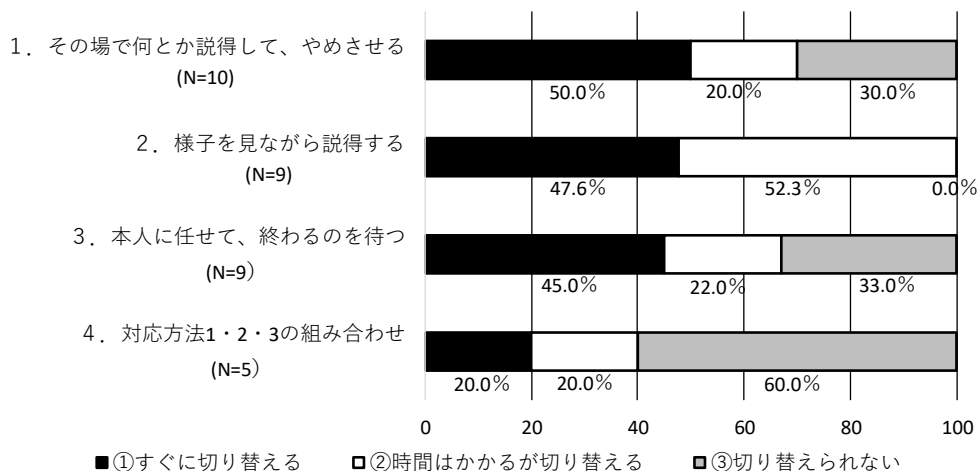


Fig. 11 こだわりが出現した年齢 (幼児期)

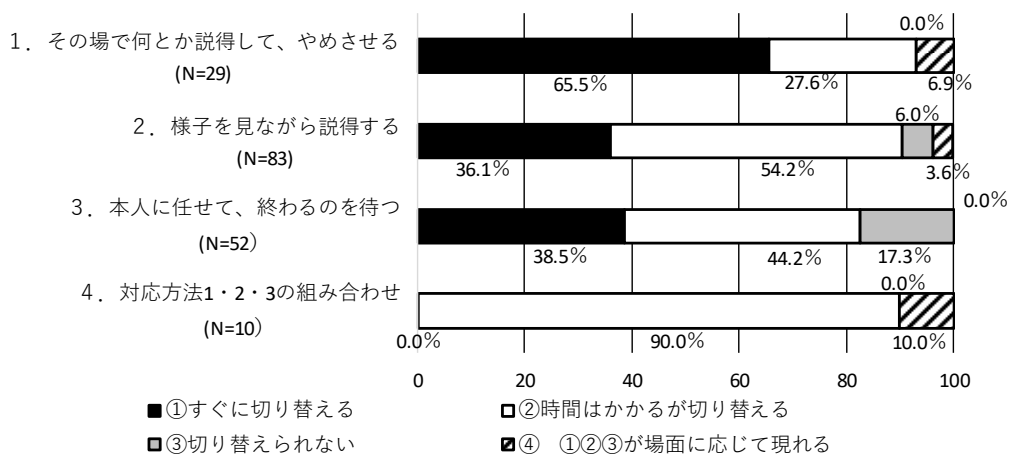


Fig. 12 こだわりの対応方法別切り替え (学齢期)

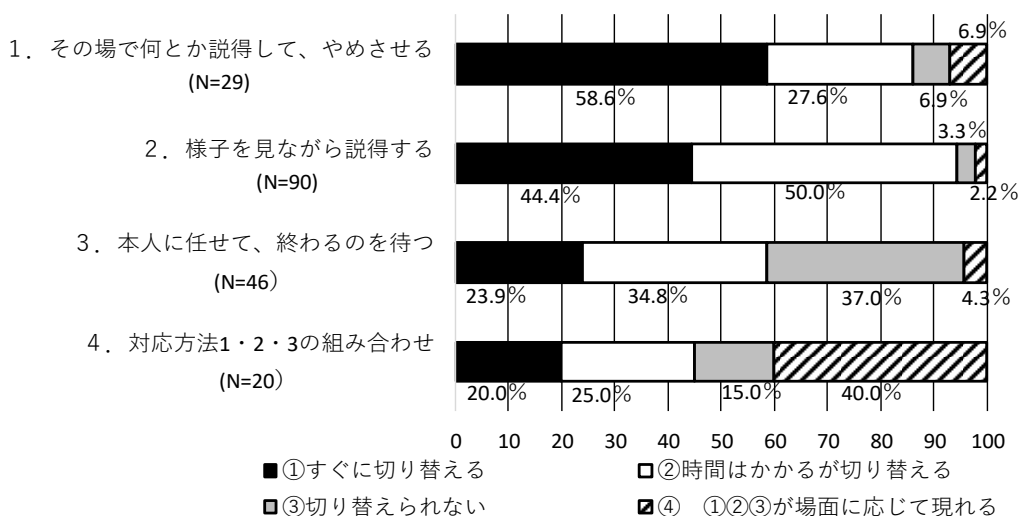


Fig. 13 こだわりの対応方法別切り替え (青年・成人期)

回答が少なく、「切り替えられない」との回答が多いことがわかった。

全体として、こだわりへの対応がされていると、「切り替え」が良く、対応がされていないと「切り替え」が悪いことがわかる。また、その傾向は、年齢段階が上がるにつれてより顕著にみられることがわかった。よって、ダウン症においてこだわりに対しては、本人に任せるのではなく、しっかりと対応をしていくことが必要であると考えられる。

また、「切り替え」と年齢、性別、合併症の有無、障害の程度、コミュニケーション能力との関係を検討した結果、障害の程度とコミュニケーション能力に関係性があることがわかった。Fig.14 は障害の程度と切り替えのグラフ、Fig.15 はコミュニケーション能力と切り替えのグラフである。障害の程度では、軽度で「すぐに切り替える」が多く、「時間はかかるが切り替える」が少なかった。また重度で「時間はかかるが切り替える」が多く、「すぐに切り替える」が少なかった。コミュニケーション能力では、単語程度で、「時間はかかるが切り替える」が多

く、「すぐに切り替える」が少なかった。また、複雑な会話で、「すぐに切り替える」が多かった。一方で、「切り替えられない」と障害の程度、コミュニケーション能力には関係性がみられなかったことから、全く切り替えられない要因は、障害の程度やコミュニケーション能力ではないことがわかった。

こだわりにしっかり対応していくという養育姿勢は、各ライフステージにおいて何を大切に養育してきたのかという保護者の養育上の配慮に差が生じていることが考えられる。この仮説の下、比較的切り替えの良い群となかなか切り替えられない群の2群間で、切り替えと養育配慮との関係を調べた。χ²検定をおこなったところ、小学生においては、運動に関する領域と「切り替え」に関係性がみられた(χ²(4)=11.39, p<.05)。中学生においては、睡眠に関する領域(χ²(2)=7.39, p<.05)と、身だしなみに関する領域(χ²(6)=17.16, p<.01)において、切り替えとの関係性がみられた。また、青年・成人期においては、睡眠に関する領域(χ²(2)=6.89, p<.05)と、食事に関する領域(χ²(6)=14.88,

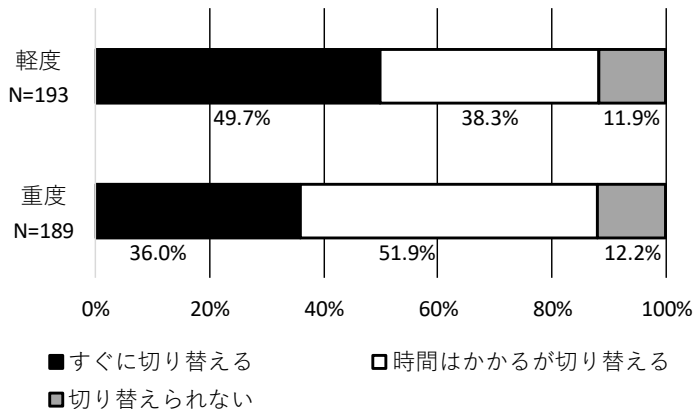


Fig. 14 障害の程度による切り替え

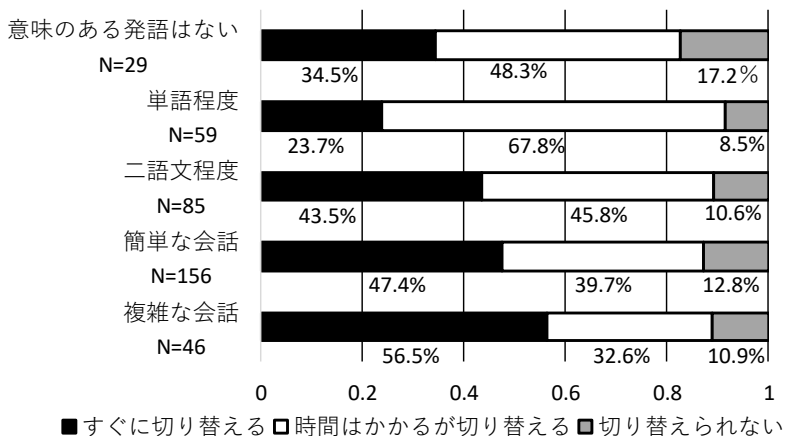


Fig. 15 コミュニケーション能力と切り替え

p<.05), 運動に関する領域($\chi^2(4)=8.71, p<.1$), 興味・関心に関する領域($\chi^2(10)=19.70, p<.05$)において、「切り替え」との関係性がみられた。以上の結果を Table 1 にまとめた。

表より、年齢が上がるについて比較的切り替えのよい群の保護者は養育において配慮する領域が増えていることが明らかである。また、その具体的な配慮領域は幼児期からの運動を大切にされた配慮に始まり、身だしなみ、睡眠、食事、興味関心、そして青年期になって、運動を大切にされた取り組みへと、ライフステージごとにその時期その時期に求められる配慮領域(発達課題)に取り組んでいることが明らかになった。

● Ⅲ. 考察

菅野(2004)⁶⁾では、「こだわり」に関して DSM-III と DSM-IV の自閉性障害の診断基準を用いて「(こだわりに関する)行動質問票」を作成し、ダウン症、自閉症、他の原因による知的障害(広汎性発達障害を除く)、急激退行を示すダウン症を対象にこだわりの出現の実態を調査した。その結果、障害種別では予測通り自閉症で最も高率にこだわりが現れていたが、ダウン症にも知的障害よりも高率に認められた。さらに、こだわりの具体的な内容を見ると、ダウン症の「こだわり」は自閉症同様、視空間に関するもの、時間・順序に関するもの、手洗いや儀式歩行などの各項目にわたっていることが明らかになった。また、より高齢でこだわりの出現率であること、特にダウン症は学校や施設に比べ家庭で多く現れていること、急激退行を示すダウン症者では自閉症とほぼ同程度のこだわりを示し、こだわりの内容によっては自閉症よりも高い出現率の行動もあることが明らかにされた。

しかし、ダウン症におけるこれらの結果が果たして幼児期や学齢期から共通にみられることなのか、あるいはここで対象となったダウン症者の平均年齢にあたる青年期、成人期になって急に現れることなのか、またこだわりの年齢や遅滞の重度化によるこだわりの増加は、量的なものなのか、質的な変化があるのか、などは

検討課題であった。

2007 年の調査では、幼児期と学齢期を含めてダウン症の「こだわり」について検討した。この調査においてもダウン症におけるこだわりは、遅滞の重度化と年齢により増加すること、コミュニケーション能力にも関係があることがわかった。また、「こだわり」の出現年齢をみると、幼児期から成人期までのどの年齢段階でも出現していることがわかった。

さらに、「切り替え」について検討すると、「こだわり」への対応と「切り替え」については、どの年齢段階においても「こだわり」への対応がされていると、「切り替え」が良く、対応がされていないと「切り替え」が悪いことがわかった。また、その傾向は、年齢段階が上がるにつれてより顕著にみられることがわかった。よって、こだわりに対しては、本人に任せるのではなく、なんらかの対応をしていくことが必要である。

「切り替え」の要因については、障害の程度、コミュニケーション能力があげられた。また、「切り替え」と養育の配慮についても関係性があり、養育配慮項目が多い方が「切り替え」が良好であり、ライフステージごとにその時期その時期に求められる配慮領域(発達課題)に取り組んでいることが明らかになった。この結果は、「こだわり」への対応は、その問題への直接的な対応だけではなく、ライフステージ各期に求められる発達課題に取り組むことの重要性を示唆する結果となった。

以上のことから、ダウン症のこだわりについては、何らかの対応をし、切り替えられる支援をするとともに、ライフステージ各期に求められる発達課題に取り組むことが必要である。

文 献

- 1)細川かおり・菅野敦・橋本創一・池田由紀江(1998): ダウン症児の学校における適応行動の特徴、特殊教育研究施設研究年報、75-82.
- 2)菅野敦(1998): 成人期ダウン症者の加齢に伴う能力と行動特性の変化—生涯発達の視点から見た発達特性とタイプ—発達障害学研究、20(3)、61-71.
- 3)菅野敦(2008): ダウン症の「急激退行」に対する発達の理解、みんなのねがい 2月号、20-23.

Table 1 切り替えと各養育配慮の領域との関係

	食事	睡眠	興味関心	身だしなみ	運動
幼児期					
小学生					*
中学生		*		*	
青年・成人	*	*	*		(*)

p<.05 ()p<.1

- 4)菅野敦(2016) : ダウン症候群の成人期移行の現状と問題点—障害発達における青年期・成人期移行の課題と支援—. 小児科臨床別冊, 779-789.
- 5)菅野敦・橋本創一・池田由紀江・細川かおり・川崎葉子・横田圭司(1997) : 青年期・成人期急激『退行』を示したダウン症候群への治療教育, 特殊教育研究施設研究年報, 113-121.
- 6)菅野敦・川崎葉子・横田圭司(2004) : ダウン症候群のこだわりに関する研究. 特殊教育研究施設研究報告, 3, 89-97.
- 7)Laveland,K.A.&Kelly,M.L. : Development of adaptive behavior in adolescents and young adults with Autism and Down Syndrome .American Journal of Mental Retardation, 93(1), 84-92.
- 8)岡村亜希子・橋本創一・菅野敦(2008a) : ダウン症児者の生活リズムに関する実態. 日本発達障害学会第 43 回研究大会.
- 9)岡村亜希子・橋本創一・菅野敦(2008b) : ダウン症児者のこだわりの実態に関する研究. 日本特殊教育学会第 46 回大会.
- 10)岡村亜希子・橋本創一・菅野敦(2009a) : ダウン症児者の「こだわり」への対応と切り替えについて. 日本発達障害学会第 47 回大会.
- 11)岡村亜希子・橋本創一・菅野敦(2009b) : ダウン症児者の「切り替え」と本人要因の関係. 日本特殊教育学会第 44 回研究大会.
- 12)小澤勲(1968) : 幼児自閉症論の再検討(1)—症状論について—児童精神医学とその近接領域, 9(3), 147-171.
- 13)斉藤優子・宮本信也(2000) : 青年期ダウン症候群における「退行」現象. 小児の精神と神経.